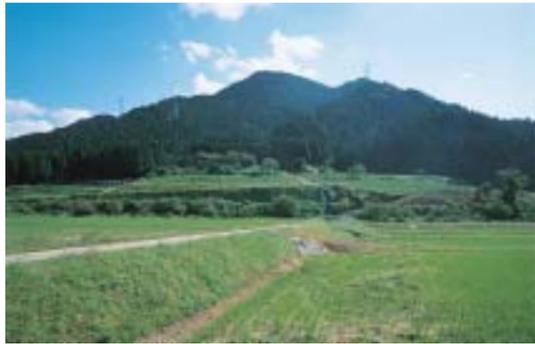


# 蓑脇の時水

福井県越前市



山頂が2つある大平山。味真野地区は田園が広がるのどかな町だ。

越前市街から東に約8km、<sup>けいたい</sup>継体天皇の伝説で有名な<sup>あじまの</sup>味真野地区がある。ここは、今から1200年前、平城の都から流された<sup>なかとみのやかもり</sup>中臣宅守と、都で宅守を思う<sup>さゆのあとがみのおとめ</sup>狭野弟上娘の恋の歌の舞台になった地としても知られる。2人の中で詠まれた歌は『万葉集』に63首残され、その悲恋を現代に伝えている。

その味真野地区の蓑脇町に、標高611mの<sup>たいへいざん</sup>大平山がある。この山の中腹、<sup>こゝろたん</sup>木呂谷と呼ばれる谷間の洞孔から水が吹き出て音を響かせている。それが「蓑脇の時水」だ。

麓から杉林の中を進む。およそ1kmの道のりを登れば時水だ。北側だから、差し込む陽光の量もわずかで、辺りは鬱蒼としている。急な登りのため、汗が一気に吹き出る。少し行くと登山道は幅50cmほどになり、時折立てられている時水の案内矢印がなければ、歩いているのが道だとわからない。

登り始めて30分。水音が聞こえてきた。音のする方向へ急ぐと突然視界が開ける。谷間だ。



道路脇にある時水の案内標識。右に見えるのが大平山。



登山道は、人がほとんど通らないためか、草に覆われている部分が多い。

弓矢のような形の水量計の下から湧き出た水が流れている。時水である。その下流では落ちた水が小さな滝になっているのだろう、先ほどの水の音が



標高約300mの時水の谷間から麓を望む。水音に葉ずれの音や小鳥のさえずりが混ざり合う。

大きく聞こえる。その響きに木々の葉ずれの音や鳥のさえずりが混ざり、心地よい。

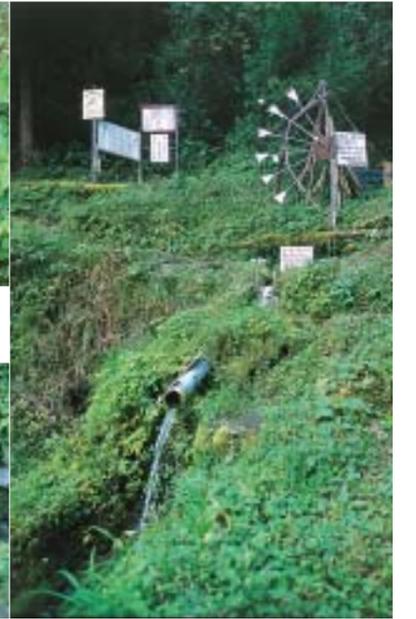
この時水は、現在は全国に5か所しかないといわれている、季節や降雨などに関係なく地下水が増減する<sup>かんけつれい</sup>間歇冷泉だ。間歇の原理は定かではないが、洞窟の中を流れる水が地下の空洞にたまり、その空洞がサイホンの働きをして、満水になると定期的に水を放出するものとされている。大平山では戦前まで石灰の採掘が行なわれていたため、



水溜りから流れ出る水。口に含むと冷たくておいしい。弱アルカリ性で、ミネラルバランスもよいといわれている。



湧き出た水は苔むした岩に当たり、水音をたてていた。この下流が小さな滝になっている。



矢印の位置で水位を測る水量計。観測は、麓の中居町から双眼鏡で定期的に行なわれている。

地下水がその脈脈を流れる際にこの現象が起こるのだという。

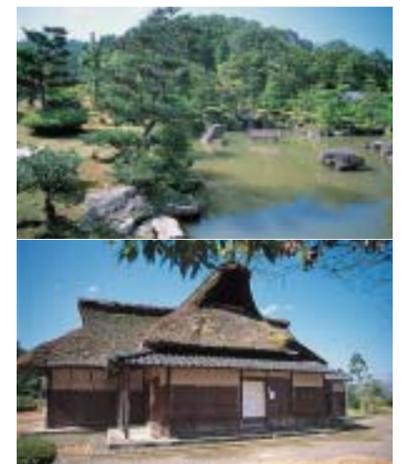
谷風が吹くなか、しばらく登山の疲れを癒していると、水量計の矢印が最高水位に近くなり、洞孔から水があふれ出た。滝音がさわやかに谷間に響く。

以前はこの湧水が1刻(約2時間)に1度起こり、時計代わりになることから、炭焼きなどの山仕事をする人たちの間で「滝の音を3回聞くとお昼である」と言い伝えられ、「時水」と呼ばれるようになったという。彼らはその音を指折り数え、休息の時間を待ったのだろう。また、ここは記録的な干ばつの年でも水が潤れず、水稻の水源として、昭和初期まで雨乞いの祈禱が行なわれていた神聖な地でもあった。

現在、1日に起こるのは18回前後で



岩の間から湧き出る水。時水の水温は年間を通じて11～12℃。水質も非常によい。



大平山の2kmほど西にある「越前の里・味真野苑」の庭園(上)と、敷地内の「谷口家住宅(下)」。味真野苑では四季折々の花と万葉の植物を楽しめる。谷口家住宅は19世紀前半の特徴を示す角屋造りの民家で、国指定重要文化財だ。

不定期だ。湧水の量も減り、一定もしていない。しかし、その不思議な現象とそれによって起こる水の響きは清涼感を与えてくれる。その音は、今でも人を魅了し続けているのだ。

よく聞こえる時期  
1年中聞くことができる。  
問い合わせ先  
越前市環境政策課 ☎0778(22)3003

参考文献：環境省大気保全局大気生活環境室発行『残したい日本の音風景100選』JCNプレット